

## サー・トマス・ブラウン著

### ハイドリオタファイア<sup>\*</sup> (その一)

わが敬愛する友、クロストウィックのトマス・ル・グロウ殿<sup>(1)</sup>

火葬の薪が燃え尽き、最後の儀式が終わると、人々は葬られる友人に永遠の別れを告げるばかりで、後の時代がこの遺灰に対していかなる好奇の眼を向けるかなどについては考えもしませんでした。また、遺骨を長く保存する古くからの知識も持ち合わせていなかったので、将来それがどうなるかといったことにも思い及ばなかったのです。

しかしながら、遺骨の運命を、またそれが幾度埋葬されることになるのかを、誰が知りましょうか。遺灰がいずこへ散逸することになるのかを、誰が予測出来ましょうか。多くの人々の遺骨は、ポンペイウス一族の場合同様、この地上の至るところに埋もれており、ます。そうした遺骨が私たちの許へ辿り着いたとき、それは遙か遠くからさまよってきたのだと思われるかもしれません。実のところは、あなたと北極との間に横たわるお馴染みの土地を僅か数マイルだけ、子午線に沿って真っ直ぐ旅をしてきたに過ぎないのです。テーセウスの遺骨がアテナイで再び見られる<sup>(4)</sup>というのは推測出来ない事

### 生田省悟・宮本正秀 訳

態ではなく、むしろ心から期待出来ることでありました。しかし、今ここにある遺骨が折よく現れたのは運命の巡り合わせであり、予測もつかぬほど有り難いことであります。

これらの骨壺が、劇場に置かれた器やローマの楕円型競技場にあった巨大な壺と同じ効果を持ち、あなたにふさわしい喝采と賞賛を響きわたらせてくれたならと願わずにはおられません。しかし、これらは埋葬の壺であり、喜ばしい声をあげることはありません。古の死者と忘れ去られた時代の遺物とを、無言のうちに示すばかりです。生き生きと語りかけてくることといえば、この朽ち易い肉体にも長く減びることのない部分があり、それは、後の時代に生を受けるはずの人々の骨や現代の立派な城よりも長く残り得るのだという<sup>(5)</sup>ことだけでしょう。

非常にみごとな骨壺や高貴な人々の遺灰をご覧になってこられたあなたに、これらの壺を、何か珍らしい新奇なものとしてお目に掛けるつもりはございません。あなたご自身、故事に関する知識は浅薄なものではございませんし、多くの皇帝の顔を日々ご覧になることと古の事物に思いを巡らせておられます。また、生ける人間自体

が遺物であつたような時代のみならず、生ける者の数が死せる者を凌いでいるがゆえに、この世を去ることを指すのに、多数の人々の仲間入りをすると<sup>8</sup>いう表現が適切ではなかつた時代をも考察されておられます。ならば、全能の神へとお考えを向けられますよう。神こそが古に関心を抱く者の真の対象に他なりません。神と較べるならば、最も古いものでさえ若者同然でありますし、この地球も幼子同然に、エジプト式の勘定<sup>9</sup>とは無縁のまま、万物の中で微かな声を立てているに過ぎません。

私たちは、これらの壺からあれこれ教えられましたが、この機を捕らえて、遺物について何か記そうとか故事研究家の領域に立ち入ろうとかはしませんでした。新しいものを把握したり、博識家のもたらす新奇な事柄を理解したりする時間が殆ど残されていない私たちは、古の死者の話に静かに耳を傾けるばかりです。彼らが、死の床に横たわったときと同じように殆ど口をつぐんだままである（ほんの僅かな話をしてくれただけで、突然止めてしまったようなものです）のを見ると、彼らをもう一度死なせ、私たちの手で二度目の埋葬をすることになるのが耐えられなかつたのです。

また、生ける者をなげえさせることはかりか、死せる者を生かすこと、即ち壺から古の人の名残を取り出し、遺骸の断片について語ることは、私たちの職務と無縁のことではありません。私たちの研鑽すべき対象は生と死であり、日々現実の死を目の当たりにしてもおります。墓を心に掛けるべく、人の手になる死の警告を用意したり、柩を寝台の傍らに置いたりすることは、とりわけ私たちに必要ないのです。

今こそ、目の前に現れたことを凝視すべき時であり、注目に値するものを見逃してはならないのです。古の時代が怠惰だつたゆえに、余りにも多くのものが口を閉ざしたまま、何も語り掛けてはくれませんし、歳月が記録を損なつてしまいましたので、最も勤勉な頭腦の持ち主にとつてさえ、新たな『ブリタニア』を書き上げるのはたやすい仕事ではありません<sup>10</sup>。

過去を振り返り、父祖に思いを馳せるのは時宜に合ったことであります。偉大な手本となるべきものは余りにも少なくなつております。私たちは、それを過去の世界に求めなければなりません。質朴は消え去り、不正が大腿で迫つてきております<sup>11</sup>。現在と過去から教えを受けつつ、自らを形成するために行なうべきことが山とあります。また、物事の全てが私たちの訓育に役立つとは限りません。ただ一人の申し分ないウエヌスのごとき美女を描くのに、ギリシャ中の美女が集められたように、<sup>12</sup>一個の完璧な美徳というものは、あらゆる時代の断片から造り上げられるべきでしょう。

アーサー王の遺骨が発掘されたとき<sup>13</sup>、古の人々はそれに自らの由来を見出したと考へたかもしれませんが、しかし今の私たちは、これらの壺に納められている遺骨との繋がりを主張することが出来ません<sup>14</sup>。私たちの父祖を意のままに扱つていたはずの人々の遺骨が、長い忘却の時を経て、今私たちのなすがまゝになつて見えるのを見るばかりです。しかし、これらの人々が遥か昔に行なつた悪政は忘れ、早くからこの地に文明をもたらしつてくれたことを思い起こすべきでしょう。私たちは慈悲深くこれらの遺骨を保存すべきであつて、遺灰に対して狼藉を働くべきではありません<sup>15</sup>。

古の遺物についてここに書き記すからといって、これらよりも遙か昔に滅んでしまった古代の家系について詮索したいとは思いません。また、あなたの美点をご先祖という支柱の上に築かれたなどと敢えて申し上げるつもりも全くございません。あなたご自身が、ご先祖の名譽を具現していらっしゃるのですから。あなたが長らくお持ちになっておいでの美徳を、私たちは尊敬申し上げております。その美徳こそ、あなたがお生まれになる以前の時代に似つかわしいものであると同時に、最も高貴な紋章に他ならないのです。虚飾のない、自由で常に変わらぬ寛大さと誠実さに溢れる親密な会話を、長きにわたり交わさせて頂いた私は、太古の岩より採れる寶石<sup>16</sup>と云うべきあなたに敬意を払うものであります。そして私自身、壺や遺灰に対してさえ、常にあなたの忠実な友人かつ僕であることを断言してやまないのです。

五月一日 ノリッジにて

トマス・ブラウン

ハイドリオタファイア

壺葬論

即ち

近頃ノーフォークで発見された埋葬の壺に関する小論

ハイドリオタファイア（その二）（生田省悟・宮本正秀）

## 第一章

地下の世界を深く探ろうとする際に、浅い部分で満足してしまう探求者のいることがある。彼らは、地表付近の二、三ヤードが露になると、さらに深く、ポトシ火山の内部や地球の中心に向かう領域を掘り進む気にならないのだ。地球の一方を自然がしつらえ、他方を人間がしつらえてきた。時のもたらした宝物は、壺や貨幣あるいは遺跡としての形を取りながら、浅い場所、即ち植物の根と殆ど変わらない深さのところにある。時は珍奇な品を無限に持ち、ありとあらゆるものを示してくれる。時は天に古きものを示すとともに、地中に新たなものを見出す。しかも、地球それ自体が発見の対象となる場合すらある。あのアメリカという大いなる古きものは数千年来埋もれ続けてきたのだし、地球の多くの部分も、我々にとっては未だに壺の中に入っているも同然だと言える。

もしアダムが大地から掘り出された土で造られたのであれば、<sup>17</sup>体のあらゆる部分は地中に戻ることを求めるはずに違いない。だが、自らを育んでくれた地表近くよりも、深い場所に骨を返した者は殆どいなかった。重たく土が被せられて丘のようになった巨人の墓<sup>18</sup>を好んだりせずに、背丈ほどの深さもないところで人々は満足し、被せられる土が軽く、遺骨が安らかに横たわれるようにと望んだのである。復活を願う者は、地中深く埋葬されること、即ち発掘されることもなく二度と再び人目に触れることもないようなところに、やみくもに自らの亡骸が安置されるのを好まなかった。こうした有り

難しい工夫を祖先が考え出してくれたお陰で、私たちは、祖先自身が決して見るものなかつたものを目にする事が出来るのである。

土が墓という名を独占してきてはいるが、何にもまして水は瞬時に墓となり得た。四十日で殆どの人間と他の被造物を飲み込んでしま(4)、魚でさえ、海の塩水が真水という新鮮な元素で程よく和らげられなかつたならば、死を完全には免れ得なかつた。

肉体と分離する際の魂の状態を見定めようと、多くの人々が多大な苦勞を払ってきた。その一方で、生命を失った肉体の処置という注目すべき問題について、人間はあれこれと想像をたくましくしてきた。とはいえ、大いに分別ある人々は土葬と火葬という簡素な二つの手段に従ってきたのであつた。

肉体を土葬、即ち埋葬することが古くから行なわれてきたというのは、アブラハムやイスラエルの父祖たちの例が十分に示している。それに、もしアダムがダマスカス近郊(ある伝承によればカルヴァアの丘)に埋葬されたことが立証されたならば、議論の余地はなくなるに違いない。神ご自身でさえ、ただ一人しか埋葬なさらなかつたとはいえ、喜んでこの方法をお選びになられたことは、聖書の記述や、モーゼの遺骸の発見を巡って行なわれたサタンと大天使との激しい論争からも推測されるところである。しかしながら、火葬という習慣も古くからのもので、その行なわれていた範囲も決して狭くはなかつた。というのも(同様の例をヘーラクレスから引くまでもなく)、火葬に関する優れた記述が、ホメーロスの描くギリシア流の葬儀、即ち儀礼に則って執り行なわれたパトロクロスとアキレウスの弔いに見られるからである。さらに古い例としては、テー

べ戦争におけるメネケウスとアルケモルスの厳かな火葬がある。彼らはイスラエル第八代の士師ヤイルと同時代人であつた。また、トロイの間でも火葬が行なわれていたことは、ヘクトールを弔うべく、トロイの城門前で薪が焚かれたことから確かである。さらにアマゾンの女王ペンテシレイアも火葬されているし、アジアの内陸諸国でも長らくこの習慣が続けられている。時代が下つたユリアヌス帝の治世でも、キオニアの王は息子の亡骸を火葬し、その遺灰を銀の壺に入れて葬つたことが知られている。

同様の習慣は遙か西にも広まっており、ヘルリア人、ゲート人、トラキア人以外にも、ケルト人、サルマティア人、ゲルマン人、ガリア人、デーン人、スウェーデン人、ノルウェー人の大半に見られた。カルタゴ人やアメリカ人の間でも見られたことも省くべきではなからう。ローマにおける火葬の習慣は、プリニウスを始め大半の人々が認めているよりも遙かに以前から行なわれていた。というのも(火葬ないし埋葬は市内で行なうこと、火葬の際はカンナをかけた木を用いて火をおこすこと、また葡萄酒で消火することなどを定めた十二表があつた他に)執政官マンリウスは息子の亡骸を火葬しているからである。またヌマは、遺言の特別条項により、火葬ではなく埋葬されているし、オウイデイウスの記述によれば、レムスは厳かに火葬されたという。

コルネリウス・シラは、その亡骸がコルネリウス一族の中で最初に火葬された人物ではあつたが、ローマで最初の例というのではなかつた。火葬は、それまでは普通に行なわれてはいたものの、頻繁に行なわれていたわけではなかつた。しかし、シラの場合を契機と

して普及し、広い範囲で見られる習慣になっていった。もつとも、火葬が極めて一般的になったといっても、誰もがそれに従ったとは限らなかつた。烏でさえ火葬されていたようなときに、ネロ帝の妻ポペアが、自分の埋葬されるべき墓を求めたからである。さて、全ての慣習が理性という土台の上に成立したように、この火葬も、死を理性的に理解しようとする幾つかの見解に基いている。万物の根源は水であるというタレスの説に従って、亡骸は腐敗の原理に委ねられ、最後には分解して水となるのがふさわしいと考える者もいた。あるいはヘラクレイトスの説に倣い、万物を組成する根本原理たるにふさわしい火の中で最期を迎えるのが、最も自然であると考える者もいた。それゆえ、彼らは薪を高く積み上げ、亡骸をより積極的に火という元素に委ねようとした。また、そうすることで、地虫に身を墮すという目に明らかに映る変化を避け、肉体を構成する部分のうち、永続し得るものだけを残そうとしたのであつた。

火には、粗雑な混合物の純度を高めるばかりか、その奥深くに染み込んでいる靈妙なものを引き出す浄化力があると考えた者もいた。伝承あるいは理性による推測に基き、万物は薪のように燃え上がって終わるとか、この肉体は他の元素には手強すぎるに違いないとか考えた者は、当然、火による消滅を思いついたであろう。あるいは、自然に基く理由を持ち出すことなく、火葬を選んだ者もあつた。埋葬された亡骸に対して、敵が悪意に満ちた行為を加える事態を巧みに避けようとしたのである。シラが火葬という習慣を受け入れたのにも、こうした思惑があつた。彼はマリウスの亡骸を憎悪を込めて扱つたことがあつたために、内戦と復讐心に燃えたローマの

戦の後で、自身の遺体が報復を受けるのではないかと恐れたのである。<sup>24)</sup>

火葬を受け入れた者も、無関心だつた者も、それぞれ大勢いたが、この習慣を極端に好んだ者や、断固として拒んだ者もいた。インドのバラモン教徒は火と大の親友だつたらしく、自らを生きたまま燃やし、火の中で一生を終わるのが最も尊い方法だと考えていた。アテナイで自らを燃やしたインド人に関する記述によれば、呆然としている見物人に向かつて彼が発した最後のことは、「これで私は不死となるのだ」<sup>25)</sup>であつたという。

だが、火を大いに崇拜していたカルデア人は、死体を燃やすことを火の神聖さを汚す行為だとして忌み嫌つていた。ペルシャの拝火教の僧侶は同様の疑念から火葬を拒み、骨にのみ強い関心を払い、肉体を鳥や犬の餌として曝した。現在でも死骸を禿げ鷹に曝しているインドのバルシー教徒は、木製の柩でさえ火の恰好の燃料と考えて、これを受け入れてはならないとこだわり続けている。もつとも、死者を火葬したゲルマン人が大地の神ヘルトウスを汚すのでないかという恐れを抱いたか否かについては、未だ信頼に足る推論が得られてはいない。エジプト人は、火を神としてではなく、肉体を無慈悲にも燃やし尽くし、殆ど跡形もなくしてしまう貪欲な元素として恐れていた。それゆえ、亡骸に貴重な香料を詰めて乾燥土に安置したり、あるいは硝子の器に密閉したりするという、完全な形で保存するための優れた方法を考案した。このようなエジプト人の恐れをピタゴラスが受け継いだことから、火による消滅を最初に拒んだのはヌマヤやピタゴラス学派の人々であつたと推測される。

スキタイ人は風と剣に、即ち生と死にかけて誓ったものだが、亡骸を火葬することはもとより埋葬することも一切受け入れず、大氣に墓を求めていた。またエジプト周辺のイクティオファギ、即ち魚を食する民族は海を墓として選んだ。それにより、腐敗を目にすることを避け、肉体という海からの借り物を返したのである。一方、ホメーロスの詠う英雄たちは何よりも水と溺死を恐れていたが、魂が火から造られており、それを消し得るのは水だけであるという古い説を信奉していたためであろう。それゆえホメーロスは、アイアース・オイレーウスの身に起こったような死に、完全な破滅という意味を強く込めている。<sup>26</sup>

古代バレーアレス諸島の人々は固有の方法を用いていた。<sup>27</sup>埋葬に際し、彼らは火を一切使わず、巨大な壺と多量の木を用意した。そして死者の肉と骨を砕いて壺に詰め込み、その上に木を山のように積んだのである。中国人は、亡骸を火葬したり壺に入れて埋葬したりせず、樹木及び大きく焚かれた火に頼っていた。<sup>28</sup>即ち、墓の傍らに松を植え、また墓の上で忠実な召使や馬が描かれたものを数多く燃やしたのだ。野蛮な民族ならば実物を求めるところを、文明を知っていた彼らは、絵に描かれたものを供とすることで満足したのである。

キリスト教徒は、この火葬という方法を忌み嫌っていた。生きながら焼かれることを厭わない一方で、死後に焼かれることを嫌悪したのである。燃えて消滅するよりも埋葬されるほうを望んだ彼らは、神のことに厳密に従い、灰ではなく土くれに再び戻るべきだと信じていた。しかもそれが、イスラエルの父祖の慣行のみならず、救

世主やペテロ、パウロ、さらには古の殉教者の埋葬にも倣うことだと考えていた。そしてついには、異教徒と無差別に埋葬されることを極度に嫌うようになったため、それを避けるべき注意を怠った科で教会から譴責を受けた者さえ現われている。<sup>29</sup>

イスラム教徒は、この火による消滅を決して受け入れようとはしない。というのも、彼らは、跪けるよう中空に造られた墓に入ると、即座に黒と白の天使から裁きを受けると信じていたからである。

ユダヤ人は、埋葬という古くからの方法に頼ってはいたが、時として火葬を受け入れたことがあった。ヤベシの人々はサウルの亡骸を焼いているし、<sup>30</sup>また、これが禁止された慣習ではなかったことから、<sup>31</sup>疫病の流行時には感染や汚染を避けるべく、同胞の亡骸を焼いたからである。また、亡骸を火葬しなかった時でも、場合によっては亡骸の近くないしその周囲で大きな篝火を焚いたことがあったのは、ヨラム、ゼデキヤ、あるいはアサの<sup>32</sup>壮大な薪に関する記述から推測出来るところでもある。さらに、異教徒における火葬をそれほど嫌悪しなかったユダヤ人は、彼らの友人でありポンペイウスに対する復讐者でもあったカエサル<sup>33</sup>の死を嘆き、その亡骸が幾夜にもわたって焼かれた場所を頻繁に訪れたという。しかも、同胞のために立派な墓や廟を<sup>34</sup>建立した彼らユダヤ人は、メデア王やペルシャ王のために長く残る墓廟をエクバタナに造ったダニエルに倣い、他民族にそのようなものを建ててやる労を厭わなかった。

だが、屈従かつ苛酷な隷属の時代にあつてさえ、ユダヤ人は火葬というローマの習慣には従わなかった。だからこそ、キリストに関する予言、即ちその亡骸が腐敗を経験することもなく、一本たりと

も骨が損なわれることはないという予言<sup>36</sup>がかなえられたのであった。私たちの信ずるところでもあるが、神のご意志により、キリストの肉体は兵士の槍や手足の小骨をかすめて貫く釘から守られていた。キリストの亡骸が、ローマの磔刑の掟に従ったまま十字架上で朽ち果てるべきではなく、また、罪人の髪を切るという行為がユダヤの慣習に見られてはいたものの、その髪の本も消え去るべきではないというのは、人には思いもよらぬお考えに基いているのだ<sup>37</sup>。

彼らユダヤ人は、エジプト人と長いこと共に暮らしていた頃でさえ、香料を用いる完璧な防腐法に頼りはしなかった。十分に筋肉をそぎ落とし、脳や内臓を取り出すことで、エジプト人は全き復活の素材を破壊してしまい、エノク、エリヤ、ヨナという予表<sup>38</sup>に倣わなかったからである。死者の亡骸をそのようなエジプトの習慣から守ること、あるいは本来の姿に留めておくことは、どちらも、復活すべき霊に便宜をもたらすに違いない。それにより、死者の霊は死の拘束を裁ち切り、臘布と何百ポンドもの膏油を拭い去り、墓石が転がされるよりも前に、墓の外へ出て来れるに違いない。

ユダヤ人はこの火葬という習慣を受け入れなかったが、彼らが行なった儀式の多くはギリシャやローマの葬儀にもかなうものであった。彼の地で見られる弔いの宴、墓前での嘆き、楽の音、涙にくれる人々などを目にした者は、また、死せる友の目を閉じてやり、亡骸を洗い清めて油を塗り、それに接吻するさまを目にした者は、これらが単なる異教の儀式ではあり得ないと断定するであろう。しかしながら、ユダヤ人における哀歌の疊句やアブラムへの三度の呼び掛けが、<sup>39</sup>他民族の行なう、死者への最後の呼び掛けや三度繰り返

される告別のことばと何か関連があるのか否かについては、今のところ根拠に乏しい推測をするに留まっている。

市民法の学者は、埋葬が専ら民族の掟に由来すると考えるが、他にも、自然に基くものだと唱え、動物にもその例を求める者がいる。未だに不死鳥の物語を信じるほどに愚鈍な者ならば、動物の火葬を肯定するようなことを言うかもしれない。だが、より理性的に推論を行なうならば、象と鶴における埋葬の実例や蟻における埋葬用の小部屋、さらには蜜蜂の習慣を見出し得るであろう。蟻の文明社会では、死者を運び出し、埋葬とは言わないまでも、弔いを執り行なうのである。

## 第二章

火葬あるいは土葬にまつわる儀典や儀式などについては、諸家が厳かに論述している以上、敢えてここに繰り返すなどという、読者諸賢の名譽を汚す愚は控えたい。ただ、これらの壺に納められた、人間にとつて最後のものであると同時に長く残されたもの、即ち集められた遺骨や遺灰についてだけは、全く省いてしまふわけにもいかなないであろう。先頃、偶然にも私たちの許で見出された壺が提示する事柄を避けて通ることは出来ないのである。

古きウォルシングムの野原で、四十から五十に近い壺が掘り出されたのは、何か月も前のことではなかった。それらは乾燥した砂土の、一ヤードの深さもないところに比較的まとまった形で安置されていた。厳密に言えば、全てが同一の形態ではないが、その殆どは

ここに描かれたものに当てはまっている。<sup>(1)</sup>それらの中には、火葬された跡を鮮やかに留めているばかりか、頭蓋骨、肋骨、顎骨、また大腿骨のように識別可能なニポンドもの遺骨が納められ、さらに副葬品として小箱の板切れやみごとな造りの櫛、また真鍮製の何かの柄や鍔が添えられているものがあつた。さらに、オパールらしきものが入れられた壺も一つあつた。<sup>(2)</sup>

同じ地点の付近約六ヤードの範囲から、炭や灰となつた物質が発掘されたが、それによつて、ここが亡骸を火葬した場所かも知しくは祖先の霊に生贄を捧げた場所、即ちウーストリーナではなかつたかと推測される。神々や英雄たちの祭壇であるアラエが地上に据えられたのとは違い、ウーストリーナは、正式には地面に掘られた場所に置かれていたのである。

ローマで見られるのと同じ慣習に従っている事実及び発見された場所からして、これらがローマ人を葬つた壺であると考えるのは、むしろ當を得た推測であろう。その場所はかつてのローマ軍の要塞からさほど遠くはないし、古い記録にはブラノドウヌムの名で記されているブランカスタからも僅か五マイルの距離だからである。

また、七つの教区を持つ町がこれに隣接しているが、ローマ軍の駐屯地が置かれていたその町も(サクソン語の語尾になつてはいるが)さほど音の違わないバーナムという名を今に留めている。従つて、近隣諸地域がローマ人自身、あるいは彼らの慣習に従うローマ化されたブリトン人によつて占められていたというのもあり得ないことではない。

ローマ人が早くからこの地域を掌握していたというのも、考えら

れないことではない。この地域の厳密な詳細については言えば、コンスタンティヌス帝の新たな統治よりも以前のこと、あるいはサクソン沿岸を領地としていた伯爵の軍事攻勢よりも以前のことはよく分かつていない。またサクソン人が侵攻してきた頃にダルマティアの騎兵がブランカスタに駐屯していたのだが、これ以前についても詳細は不明である。しかしながら、クラウディウス帝、ウエスパシアヌス帝及びセウェルス帝の時代には、三つもの軍団がブリテン一帯に広く配されていたことが分かっている。さらには、クラウディウス帝の統治の頃、既に、ローマ軍の副官オストリウスによつてイケニ族に対する大規模な制圧が行なわれてもいる。その後間もなく、この地域が大混乱に陥つたため、事態の改善を願つたイケニ族の王プラスタグスは王国をネロ帝と自分の娘たちに遺贈したが、妃のバウアデイシアはパウリヌスと最後の決定的な戦いを行なつた。<sup>(4)</sup>このような時期やウエスパシアヌス帝の副官アグリコラの征服を経て、恐らくローマ人が一帯を完全に占領し、自分たちの安全に最も都合のいいように駐屯地と居留地を配したのである。従つて、ウエスパシアヌス帝の時代に、既にローマ人居留地の幾つかがこの地域にあつたと思われる。後にサクソン人がここに定住することになつたが、余り地名が記されていない彼らの地図に、ウォルシンガムの名を読み取り得るのである。ところで、イケニ族が、ガマデ人ないしアンコニア人、即ち本来の語源通りにブリテン島の先端の楔や肘に当たる場所に住む民族なのであれば、まさしくイケニアの肘(イケ<sup>(5)</sup>)を成しているこの地域は、より明確な呼称を必要とするであら



プリテン島に多くの人々が居住していたことは、カエサル<sup>(6)</sup>の記述からも疑い得ない。既にローマ人自身、七万人もの少なからぬ数<sup>(7)</sup>がその友人たちと共にバウアデイシアによって殺害されたという確かな話もある。また、多くのローマ人の居留地は今では不明となつてはいるが、場合によっては古い建造物や畧壁、あるいは貨幣や壺などによって、彼らが占領していた事実が立証されている。これまでに数個の壺がカスター付近及びサウスクリーク付近で発見されているし、近年では、記録に残っているどの駐屯地からも離れたバクストンの野原で十個もの壺が見つかつている。ウエスパシアヌス帝、トラヤヌス帝、ハドリアヌス帝、コンモドウス帝、アントニヌス帝、セウエルス帝などの刻印された銅貨や銀貨が私たちの許で見つかるのも稀なことではない。しかし、その大半はディオクラヌス帝、コンスタンティヌス帝、コンスタンス帝、ウアレンス帝のもので、次に多いのがウィクトリヌス帝、ポストウムス帝、テトリクス帝、さらにはガリエヌス帝治世下の三十人の圧政者のものである。より古い時代のハドリアヌス帝のものも、『アントニヌス帝行幸記』で、ウエンタ即ちカスターからロンドンに至る道筋に位置すると述べられた、テトフォード即ちシトマグス<sup>(9)</sup>付近で見つかつている。だが、こうした貨幣が最も頻繁に発見されるのは、ノリッジとヤーマス<sup>(10)</sup>近郊の二つのカスター、つまりはバラ・キャッスルとブランカスター<sup>(11)</sup>においてである。

カスレド王、カヌートウス王、ノルマンデイ公ウィリアム、マティルダ女王などの刻印されたノルマン人、サクソン人、デーン人の貨幣の他にも、プリトンの金貨があちこちで見つかつているし、少な

からぬ銀貨がノリッジ近郊<sup>(13)</sup>で見つかつてもいる。これらの表には粗雑な細工による肖像が、裏には不格好な馬と「*Deo, Duro, I.*」という文字<sup>(15)</sup>（それがイケニ、ドュロトリゲス、タスキアあるいはトリノバンテス<sup>(15)</sup>を意味するの<sup>(14)</sup>か否かは、優れた人々の推測に任せよう）が刻印されている。民衆に流布している年代記は、ノリッジ城をユリウス・カエサルの時代のものだとするであろうが、彼とこの地を隔てる距離やゴシック様式に従った城の構造から判断すれば、それほど古い時期のものではないことが分かる。プリトン人の貨幣が見つかったことから、この地域に早くからプリトン人が居住していたと推測する者もいるが、ノリッジの街はウエンタの廃墟から起こったものである<sup>(16)</sup>。また、それ以前にもプリトン人が多少は居住していたのかもしれないが、この街はサクソン人によって拡大され、構築され、そして命名されたのであった。ノリッジが、古代東アングリア王国において、どれほどの規模と人口を擁していたのかについては、伝承も歴史も口を閉ざしている。なお、デーン人の侵入の際にスエノがテトフォードとノリッジを焼き払ったところ、彼の地の統治者ウルフケーテルが抵抗を試みた上、デーン人の艦隊を焼き滅ぼそうとしたが<sup>(17)</sup>、その頃のノリッジはかなり大きな街になっていた。

なぜローマ人が征服した地にこれほど多くの貨幣を残したのかは、解決し難い問題である。ただ、野蛮人の侵攻を受け、殆どの地域で居留地を放棄せざるを得なくなった時に、貨幣を地下に埋めたと考えることは出来るかもしれない。あるいは、貨幣を他の目的に流用することを禁じた厳しい法律があったためだと言えるかもしれない（ちなみにスパルタ人は、銅貨を使用不能にする際は酢と練り合

ハイドリオタファイア（その一）（生田省悟・宮本正秀）

わせるという特異な手段を講じた<sup>(18)</sup>。ブリトン人が貨幣を残していることに驚く人がある。カエサル以前の時代では、彼らは鉄及び鉄の環を通貨として用いていたし、それ以後にあっては、認可を受けて刻印された貨幣を用いたが、それは極めて貧弱なものだったからである。サクソン人の貨幣は殆ど残っていない。彼らの地が次々と征服者によって制圧されたことから、彼らの貨幣も徐々に他の貨幣に、また後の時代に鑄造された貨幣に取って替わられてしまったのである。

これらの壺が埋められたのはいつの時代なのか、即ちこれらの遺物が、正確にはどれほど古いものなのかということ以上に曖昧なことではない。この地に最初に侵入してきたのは、クラウディウス帝の副官であったと思われる。また、ネロ帝の軍勢がバウアディシアを制圧し、さらにアグリコラによって、こうした一連の征服が決着を迎えたという史実もある。従って、それ以前に、ローマ人による駐屯や植民がこの一帯で徹底して行なわれていたとは考え難い。それゆえ、これらの壺はその時期以後のものではあっても、それ以前の古いものではあり得ない。

後の皇帝たちも、この地や他の地域の征服から手を引かなかったことは、歴史や今も残るメダルの銘刻が立証している。ローマから遠く離れたこのブリテンの地で、銘刻による皇帝の肖像が数多く見られ、およそのところだけでもカエサル、クラウディウス、ブリタニクス、ウェスパシアヌス、ティトウス、ハドリアヌス、セウエルス、コンモドウス、ゲータ、カラカラの各帝に及んでいる。

この点に関し、今回見つかった壺には大いに曖昧なところがある。

それは、埋葬された時期を示すはずのメダルや皇帝の肖像を刻んだ貨幣が壺には納められていなかったからである。こうした類は従来多くの壺に見られたし、ロンドン近郊のスピトルフィールズから出土したものにも納められていた<sup>(20)</sup>。その詳細を挙げるなら、クラウディウス帝、ウェスパシアヌス帝、コンモドウス帝、アントニヌス帝の貨幣に加えて、涙壺、ランプ、酒瓶が、さらには迷信に従って添えられた哀惜を表わす品々があった。しかしながら、田舎で見つかった私たちの壺には、こうしたものが見当たらなかった。

火葬の行なわれていた時代や時期、またその習慣が廃された時期について、不明瞭な点が幾つかある。マクロビウスは、彼の時代には火葬が行なわれていなかったと述べている<sup>(21)</sup>。だが、大方の同意するところでは、信頼に足る記録はないものの、アントニウスの名を持つ諸帝の時代と共にそれは終わりを告げたとされている。最も無難なのは、マルクス・アントニウス帝の直後ではなく、アントニウス諸帝の治世がヘリオガバルス帝まで続いた後に、火葬も終わったと理解することであろう。というのも、マルクス・アントニウス帝の約五十年後に、セウエルス帝のための荘厳な火葬と聖別の式典が執り行なわれているからである。火葬にまつわる時期をこのように特定出来るとすれば、私たちの壺は千三百年以上も前のものだろうことになる。

しかしながら、火葬という習慣をその時代に廃したのが皇帝や身分の高い者に限られていたのか、それともローマ全体がこれに倣ったのか、あるいは、その他の属州では従前通りであったのかといった事柄については、信頼に足る説明が一切なされていない。という

のも、ティルトウリアヌス以降のミノキウスの時代に、キリスト教徒が、火葬の習慣を非難したという理由から公然と批判されているからである。さらにシドニウスには、この習慣がフランスでは比較的最近のものであるといった一節もある<sup>24</sup>。従って、キリスト教が完全に確立して、甲いの火を最終的に禁止することになるまでは、火葬は必ずしも廃れてしまったわけではなかったと思われる。

埋葬場所の区別に関する古代の慣習が不明である以上、私たちの目の前にある遺骨が男のものなのか、女あるいは子供のものなのかに関する確かな結論は下せない(但し、アブラハムに二つの墓があったことは、埋葬場所を区別するという意図に基いていたからだ<sup>25</sup>と推測出来ないわけではない)。もつとも、骨のか細さ、頭蓋骨の薄さ、歯や肋骨や大腿骨の小ささから、その多くは若年者か女性のものである可能性が高い。それは、壺に納められていた品々からも確かめられる。大半の壺に見出せる品としては、櫛らしきもの、鉄釘で留められ、元は、楽器の棹やこまのようにみごとな装飾の施された箱ではなかったかと思われる板、品の良い道具の柄にも似た凝った造りの細長い真鍮の板、髪を抜き取るための真鍮の毛抜きがあった。また壺の一個からは、未だに青みがかった色を留めているオパールらしきものが見つかっている。

ところで古代では、あらゆる喜びと別れるしとして、あるいはあの世でも使えるかもしれないという空しい思いから、死者が生前秀でていたもの、楽しみとしていたもの、また愛しく思っていたものを、亡骸と共に燃やしたり埋めたりする習慣があった。それは、あらゆる遺物から立証されるところである。例えば、火葬された後、

ハイドリオタファイア(その一)(生田省悟・宮本正秀)

亡霊としてプロペルティウスの前に現れた彼の恋人キュンティアの指にあつた宝石、即ち緑柱石の指輪<sup>26</sup>からも、その習慣が見られるであろう。また、枢機卿ファルネーゼによって保管されていたあのローマの壺の中身も、その習慣を明確に示している。その壺からは、神々や女神たちの肖像が刻まれた多数の宝石類に加えて、瑪瑙の猿、琥珀の蝗と象、水晶玉、ガラスの杯三個、匙二本、それに水晶の杯六個が見出されている。壺に納められたものに留まらず、三年前偶然にもトウルネーで発見された、ファラモン<sup>28</sup>から四代目に当たるシルデリック一世の墓廟からも今に甦った品々がある。彼の剣を惜しみなく彩る大量の黄金、二百個のルビー、王の肖像の刻まれた何百個もの貨幣、三百個の黄金の輪、さらには当時の野蠻にして壮麗な葬送の儀式に則り、王の亡骸と共に埋葬された愛馬の骨や馬蹄が現われてきたのである。一方、多くの人々の推測や七十人訳聖書の記述に従うなら、古代ヘブライ人においてさえこのような習慣があったことの痕跡を、ダヴィデの墓の宝物<sup>29</sup>のみならずヨシユアも埋めたとされる割礼用の小刀<sup>30</sup>からも見ることが出来るであろう。

壺の中身、即ち今に残る些細な品々と、他の多くの民族にも火葬の習慣があつたことを考慮して、私たちの許で見つかったこれらの壺が全てローマ人の遺物なのであるうかという疑念を抱く者がいるかもしれない。あるいは、幾つかはローマ人のものではなく、ブリトン人、サクソン人、またデーン人といった私たちの祖先のものではあるまいかと推測する者もいるであろう。

古代ブリトン人における埋葬形態については、カエサル、タキトゥス、あるいはストラボンの大著も沈黙を守っている。他の詳細と共

にそれを解明するに当たり、私たちは、キケロが弟のクイントゥスから受け取るはずの、もしくは受け取ったはずの書簡の失われたことを大いに嘆かざるを得ない。その書簡が、ブリトン人の慣習を説明してくれるはずであったのだ。あるいは、クラウディウス帝の侍医であったスクリボニウス・ラルグスによると思われる著述も失われている。ちなみに彼はまた、豆粒ほどの大きさでしかない質素な食物が古代ブリトン人の渴きと飢えを癒すことを発見したと思われる人物であった。<sup>32</sup>

しかしながら、ドウルイド教徒とその高僧たちが火葬を行なった後に遺骨を埋葬したことは、ポンポニウスによって述べられているし、<sup>33</sup> プレンヌスの兄にしてブリトン人の王であったベリヌスが火葬されたことも、ポリュドロスによって認められている。また、<sup>34</sup> ガリアにもその習慣のあったことを、カエサルが明確に伝えている。<sup>35</sup> ブリトン人（恐らくはガリア人の子孫であり、同様の宗教、言語、風習を持っていたと思われる）が、時として火葬を行なわなかったことがあるのか否か、また、後に文明化されてローマの生活様式に従った者たちが、少なくともこの習慣だけは受け入れなかったのか否かについては、歴史的に否定も肯定もされていない。だが、タキトゥスによれば、<sup>36</sup> ローマ人は早くからブリトン人に非常に多くの文明をもたらしたし、寺院を建立させ、トーガを身に付けさせ、ローマの法律やことばを学ばせたという。それゆえ、ブリトン人がローマ人の宗教的儀式や葬儀にまつわる慣習も受け入れたと理解するのは、決して無理な推測ではないと思われる。

サルマチアで死者の火葬が行なわれていたことは、ガグイヌスに

よって明言されているし、<sup>37</sup> スウェーデン人とゴート人が君主や高い身分の者を火葬したことも、サクソヤオラウスによって述べられている。<sup>38</sup> この火葬が古代ゲルマンの習慣であったことも、タキトゥスによって断言されている。<sup>39</sup> 私たちは、このブリテンという島国における葬儀の歴史的な詳細を殆ど分かっていない。また、サクソン人、ユート人、アングル人が死者を火葬したということについても同様のままである。だが、これらの人々は火葬が古くからの習慣であった土地からやって来たのである。即ち、彼らの祖先であるゲルマン人は火葬を行っていたのだ。そして、ユトランド半島やシユレスヴィツヒのアングリア・キンブリカで、遺骨の納められた壺が見つかったのは、それほど遠い昔のことではなかった。

ところで、<sup>40</sup> デーン人や北方の民族は、死者を火葬するという習慣から、時代の起点ないし計算基準を定めていた。その由来をウングイヌスに求めた場合もあったし、<sup>41</sup> フロト大帝に求めた場合もあった。またフロト大帝は、<sup>42</sup> 民衆は共同墓地に埋葬されるべきであり、王侯や主だった將軍は火に委ねられるべきであると、法律によって定めた人物であった。古の英雄スタルカテラスはこれに従って火葬され、<sup>43</sup> リンゴは、自らが殺害したハラルド王の亡骸を王にふさわしく莊嚴に火葬している。

彼らの間でこの習慣が一般に見られなくなったのはいつの時代かを、明確に特定することは出来ない。キリスト教の到来以前に廃されたのであろうか、あるいは、正確な計算に基くなら、シャルル大帝の息子ルドウィクス・ピウスの時代に、ガリア人アンスガリウスに倣って彼らが改宗した際なのであろうか。あるいは、彼らが百八

十年間にわたり異教とキリスト教とを混然と受け入れていた頃に、この習慣に従わない人々が現われたのであろうか。いずれにしても、確かな結論は出されてはいない。その頃、デーン人はイングラントで活動を繰り返しており、とりわけこの地域一帯を苦しめていたのであった。この地には、多くの城や砦が彼らによって、また彼らに對抗して築かれたのだし、彼らに由来する名前や一族が今も数多く残っている。だが、恐らく火葬という習慣は、デーン人の侵入ないし征服より以前に、この地では行なわれなくなっていたのであろう。一方、かつてこの島を占領したローマ人が、爾後この火葬を行ってきたのは、誰しも認めることである。それゆえ、私たちの許にある壺をローマ人もしくはローマ化されたブリトン人のものとするのが、最も妥当なところであらう。<sup>44</sup>

しかしながら、博識の医師ヴォルミウスによってみごとに記述されかつ鮮やかに描かれている通り、<sup>45</sup>ローマを起源としないと思われる壺がノルウェーやデンマークで度々掘り出されているのは確かなことである。また、デンマークのある地域では、そうした壺が尋常とは思えないほどの数に上っていることも、その地を正確に記述する著作家の伝えるところである。<sup>46</sup>それらに納められているのは、骨のみならず、小刀、鉄や真鍮あるいは木の破片など、多岐に及んでいる。ノルウェーでは、金でめっきされた真鍮のユダヤ琴の納められたものさえあった。

彼らは高貴な人物を安置する際に、壺や亡骸の周りに巨大な石を円形に並べたが、それは決して乱雑かつ不注意に行なわれたものではなかった。これは、恐らくは口口（後にノルマンディを征服した

人物）の建立になるイングラントのロールライトの記念碑ないし記念墓碑<sup>47</sup>にどことなく似ている。また、何かがここから見つかるといふのもあり得ないことではない。それに対して、アシユベリで発見された、太い骨と円盾の納められた巨大な壺がどの民族のものなのか、また誰のものなのかは、未だに解明されてはいない。リトル・マッシングムで発見された大きな壺についてはどうなのか、あるいは、アングルシーの壺はなぜ口を下にして置かれていたのかといったことも同様である。

### 第三章

亡骸を腐敗させることになる埋葬の場合、古くは、漆喰や白漆喰を塗った墓が好まれたし、厳格なユダヤ人でさえ、高潔な人物の墓に装飾を施したものであった。<sup>1</sup>『ヘカベ』におけるウリッセスは、死後に立派な墓に入れるのならば、どれほど卑しい人生を送ろうとも気に懸けなかった。<sup>2</sup>偉大な人物は偉大な墓廟を好み、大きくみことな壺には民衆の遺灰は納められなかった。時が私たちに示してくれた壺に違いが見られるのは、こうした理由があったためなのである。これらの壺の容量は同じではなく、最大のもは一ガロン以上もあるが、中にはその半分にも満たないものがある。また、どれ一つとして同じ形のものはない。もっとも、形状という点については、同一地域であろうと異なった地域であろうと、厳密な一致が存在しているわけではない。これは、全てイタリアで発見された壺であるとはいえず、カサリウス、ボシオなどの描いたものからも明らかであ

る。<sup>(5)</sup>これらの壺の多くには、取っ手なし耳形取っ手と長い首が付いているが、その殆どは円形で球状をなしている。それが、何か隠された理由に基いているのか、それとも優れた耐久性と容量を持っているためなのかについては、単なる推測の域を出てはいない。だが、これらに共通した形は、首が付いてはいるものの、私たちの最後の寢床を最初の寢床に似せるのにふさわしいものであろう。私たちが地下で、即ち私たちを収めた小宇宙の天蓋のもとで安らかに横たわっているのであっても、その寢床は、私たちという胎児を孕む壺に似ていなくてはならないのだ。壺というものは赤い色をしている場合が多い。だが、この度出土したものはどれも黒く滑らかであり、鈍い音をする。ならば、これらの壺は火で焼き上げられたのであろうか、それとも多くの煉瓦や瓦、瓶、それにテスタ、即ち焼き粘土製品を作る古代の方法通りに、竈や天日で乾燥させただけなのであろうか(混ぜ物を加えないときにはテスタということばを使うのが適切であり、また、プリニウスも二年ものの煉瓦と瓦を推奨し、しかもそれらを春に作るのがよいと言っているが、彼の指していたのはまさしくこのテスタのことであった)。地下に埋もれていたこれらの品々のみならず、人の目に触れる古代の壮麗なものでさえ、粘土製であることが多い。マウソルスの廟はこれで造られていたし、カピトル神殿に立っていた古のユピテル像も然りであった。タルクイニウス・プリスクス王の治世に作られた粘土のヘラクレス像も、プリニウスの時代には存在していた。<sup>(7)</sup>また、火葬も用いる壺も拒んでいた者たちは、ピタゴラスの手に倣って粘土の柩を好んだし、<sup>(8)</sup>ウアロもこれを選んだのであった。だが、偉大な人物の霊はこの限

りではなく、銅や金銀また斑岩の壺を好んだ。セウエルス帝は、いずれのもが我が身を収めるべきかを真剣に見定めた後に結論を下し、<sup>(9)</sup>斑岩の壺に入ったのである。私たちの許にある壺の幾つかは、光沢があったり、微小な金属片が付着していることから、表面が銀張りされていたとも考えられる。但し、この金属片が埋められた場所の土に由来するのか、それとも最初から壺に混ぜられていたのかは定かではない。

これらの壺からは、蓋について十分に理解を得るべき手掛かりは得られなかった。ただ一個だけは、煉瓦らしき弧形のものが被せられていたと思われる。バクストンで発見されたものには燧石の蓋があり、他の地域では瓦の蓋のものもある。ヤーマスのカスターのもの、ローマの煉瓦で塞がれていた。また中には、壺にふさわしく、陶の蓋が寸分違わず嵌められているものもある。だが、ホメーロスの伝えるパトロクロス<sup>(10)</sup>の壺は、蓋が何であれ、直接には紫の絹布で覆われていた。なお、蓋のない壺は、内部に土が固く詰め込まれているが、敢えてそのような措置が取られた場合があるのかもしれない。それらの内部では、遺骨と遺灰が側面や土に半ば付着し、ヒメカモジグサの長い根が遺骨に絡み付いたりさえしていた。

これら辺境の地で発見された骨壺には、死者の霊への捧げ物としての、あるいは残された友人の悲しみを表わす品としてのランプやその油、あるいは涙壺などは供えられていない。だが、古の人々は盛大に火を焚き、泣き男を雇って、厳肅に用いる儀式を執り行なつたし、その死が大いに悼まれる故人の墓にあつては、悲しみを表わす碑文を刻んだものであった。埋葬の壺に、長い時間の作用で寒天

状に濃縮された葡萄酒が入っていたのも発見されている（というの  
も、涙壺やみごとなランプに加えて、葡萄酒は油や香油の入った器  
と共に、高貴な人物の壺に副葬されていたのである）。しかも、葡萄  
酒としての質と酒精を未だに留めているものさえあったという。そ  
れを味わってみた者がいれば、古の人々が経験したこともないほど  
の味を知ったことであろう。葡萄酒の年代は、年毎に交替する行政  
長官を基準にした年月で数えられるべきではなく、より多くの年月  
が寄り集まった期間、例えば、運命により定められた王国の寿命に  
基いて数えられるべきである。古のローマで賞味されていたという  
執政官の時代の葡萄酒は、この壺に入っていたものと較べたら、未  
熟そのものに過ず、オピミウスの時代のそれと比べ、発酵途中のも  
のでしかないと思われるに違いない。

さまざまな墓から、指輪の類や貨幣、杯などが出てきている。古  
の人々はこの上なく質素を重んじていたので、歯を留めるのに用い  
られたもの以外は、黄金を亡骸に添えることは許されなかった。こ  
の壺から現われたオパールらしき石は、死者の指に嵌められたまま  
燃やされたのであろうか、それとも、哀惜の念に駆られた友人によ  
り火中に投ぜられたものであろうか、いずれにせよ理にかなった習  
慣には違いあるまい。だが他にも、燃えやすい物質のほゞでありな  
がら、火に焼かれた形跡が全くないものが見つかっている。一見し  
たところ、木片だと思われたが、水に沈み、火にも耐えることから、  
骨か象牙であるのが分かった。固さと色合いは、古の表現において  
不滅を表わす形容語句であった柘植に最も似ていたが、このような  
壺に納められていたために、朽ちることなく今に至っているのでは

らう。

聖フンベルトの墓で見つかった月桂樹の葉が、百五十年経ってい  
ながら緑のままであったのは奇跡に他ならないと思われる。  
ディアナの神殿に用いられたイトスギ材が何百年も持ち堪えたの  
は、それを目にした古の人にとって驚嘆すべきことであった。また、  
契約の箱の材とアアロンのオリーブの鞭は、パピロン幽囚の時代に  
は既に相当古いものになっていた。だが、ヨセフスが、彼の時代に  
見つかったノアの箱船の破片なるものを見誤ったのでなければ、そ  
の箱船に使われたイトスギは、植物の遺物としては最古のものにな  
るであろう（イングランド各地の地中から見つかっている泥炭化し  
た木やモミを除けば、の話である。ちなみに、これらは時代も定か  
でない昔に風や洪水、地震によって倒されたものの残骸なのだ。ま  
たフランドルでは、そのような木が一樣に北東の方角に横たわって  
いて、どこから倒れてきたのが今でもよく分かっている）。

これらの破片が木でないことは最初から分かったが、木のような  
物質も含まれているのを全く見落としたりわけでもなかった。骨だけ  
がきれいに選り分けられたのではなく、骨の間に炭が混じっていた  
のである。炭は木を永久のものにする手段であり、金属とも非常に  
相性がいい。壮大なエペソの神殿は炭の上に土台を据えていたし、  
かつては境界を示す標識として、耐久力を持つ炭が用いられていた。  
これらの炭を見ると、四百年を経た後でも炭の性質に変化がな  
いという観察結果を称えたりする気もなくなってしまう。人が住ま  
なくなつて久しいかつての居住地で、腐敗する気配すらない新鮮な  
ままの卵の殻さえ見つかっているからである。

シルデリク王の墓廟から発見された鉄の遺物は錆びつき、ぼろぼろに崩れてしまっていた。だが、私たちの見つけた鉄の小さな釘は象牙細工を繋ぎ留めるものであったが、未だに機能を果たしており、磁石に付くという性質も失ってはいなかった。ただ、各部をより強固に繋ぐために必要な湿り気を欠いていたのである。未だに全然溶解してはいないものの、この金属は程なく錆びつき、分解されてしまふであろう。真鍮の品について言えば、それが長持ちしたことではなく、一切錆びついておらず、しかも強く擦ると嫌な匂いがしたことこのほうを私たちは称えたのであった。だが、これも、空気に含まれた物を貫く力のある分子に晒されたからには、二、三か月もすれば染みが浮き出て、緑色をした内部が現れてくるであろう。

これらの壺が、出土したときと同様に裸のまま埋められたとは考えられないし、花を添えるという古の習慣に従わずに墓所に安置されたとも考えられない。フィロポイメンを納めた壺は花と帯で飾り立てられ、その形が見えなかったほどであった。かたくななリュクルグスでさえ、飾りとしてオリヴと銀梅花を認めていた。アテナ<sup>(28)</sup>イ人が、蜂蜜に浸って埋葬されるというデモクリトウスのやり方に断固反対したのはもつともな話であった。祖国の重要な商品であり、しかもヨーロッパ中で最上だとされたものを、無駄にするのを恐れたのである。だが、プラトンの示した分別は余りにも慎重しかつたと思われる。彼は、英雄詩四編を収め得る墓より大きなものは認めなかつたし、最も不毛な地を墓所に定めたのであつた<sup>(29)</sup>とはいえ私<sup>(30)</sup>たちでも、ユグの受け取つた僅かな報酬ほどでしつらえられた墓地が良いなどと勧めるわけにはいかない。土が骨壺の遺灰と混じり

合つてはいたものの、骨自体は十分焼かれていたので、それと共に現われた薄い真鍮の板などは、半ば溶けかかっていた。そのことから判断して、これらの遺骨が卑しい人々のものではないと考えられる。時として戦地で行なわれたり、また疫病の際には普通に行なわれたりしたように、お座なりに火葬されてはいなかったからである。あるいは、ローマのエスキリヌスの門の外側で、一山に積み上げられて無造作に焼かれる卑賤の人々の場合にも做っていないからである。なお、この方式はティベリウス帝に対して侮辱を加える際にも取られたものであつた<sup>(32)</sup>。彼の遺体は生焼けにされ、しかも、それが悪名高い罪人を処刑する慣習に従つて、楕円形劇場で行なわれたのであつた(ネロ帝は、己の死よりも首を切られること、そして遺骸が十分には焼かれないことのほうを恐れたらしい)<sup>(33)</sup>。

これらの壺に非常に多くの頭蓋骨の破片を見出したことから、複数の人物の遺骨が混ざり合っているのではないかと推測した人がいる。私たちの調査では、その推測の根拠となるべきことは、どの壺からも得られなかつたが、古の人々がそうした方法を敢えて拒否しなかつた場合は確かにあつた。ドミティアヌス帝の遺灰はユリアのもの<sup>(35)</sup>と混ぜられたし、アキレウスの遺灰はパトロクロスのものと混ぜられている。壺が、必ずしも一人の遺灰だけを収めているわけではなかつたのだ。人々は渾然と火葬したのではなく、亡くなった者たちの遺灰を愛情を込めて混ぜ合わせ、生前の結び付きを継続させてやりたいと心から願つたのである。また、死という距離がそのよ<sup>(36)</sup>うな結び付きを隔ててしまったとき、愛情の満たされぬ思いのする者たちは、墓所において二つ並んだ壺の形で隣人同士となり、名前



の記された部分だけでも触れ合っていることにせめてもの慰めを見出したのであった。また、生前の繋がりを継続させようと配慮して、一族用の大きな壺を作った人々も多くいた。この中にごく親しい友人や縁者の遺灰を次々に納めたり、あるいはそうした遺灰の一握りだけを壺に納め、所縁の遺品を、その周囲に寄り添うように並べられた小さな器に入れたりしたのである。

古の人々は、死を表わす事物を余りにも軽々しく考えていた。頭蓋骨から笑いの種を引き出す者もいたし、頭蓋骨を用いた技を披露する手品師もいた。ヴァイオリン弾きは剣闘士ほどに楽しい笑いを提供しなかったし、人々は絞首刑を目の前にしながら、平静に座っていたのだ。古には、墓に頭骸骨と骨を用いた死の警告を置くことなど、殆ど考えられなかった。エジプトの方尖塔や象形文字において、骨に出会うのは容易なことではない。墓に添えられたランプは墓自体に劣らず雄弁であり、それに刻まれた文字は往々にして猥雑かつ奇怪な内容を伝えている。古い墓碑に D. M. の文字を読み取った場合には、供物を乗せる皿や献納の葡萄酒を入れた器をしばしば見出すこともある。ローマにおけるユダヤ人の地下埋葬室ないし地下共同墓地では、さまざまなランプと無数の模様が刻まれた聖なる燭台の他は殆ど見当たらない。アントニウスとヒエロニムスの墓とされているところには、大腿骨と頭骸骨が刻まれているのが分かる。だが、古代キリスト教徒や殉教者の墓には、聖書の記述にまつわる事柄が刻み込まれていた。イトスギヤ棕櫚、またオリブといった装飾が避けられたわけではなかったが、復活を期待しかつ仄めかす徴として、エノク、ラザロ、ヨナの肖像やエゼキルの見た幻が

ハイドリオタファイア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

好んで繰り返し刻まれたのであった。これこそが墓の肝要な点であり、土籠と蟻の土地における私たちの暮らしを麗しくしてくれるものに他ならない。

異教徒の碑文は人の一生を事細かに伝えてはいるが、その死に方についてはめつたに述べてはいない。歴史自体が、重要な人物を記録するに当たっても、この点をしばしば曖昧なままにしている。ラエルティウスの記述にあつては、どの哲学者も二度ないし三度亡くなっているし、プルタルコスにあつても、二度ないし三度の死を経験しない者は殆ど見られない。これによって、貴人の悲劇的な死が、哀れみを覚える読者からより好意的に受け入れてもらえることになり、読者としても、そのように異なった死にざまのいずれかを選択し受け入れることで何らかの救いが見出せるのである。

死という確実なことには、時、様子、場所にまつわる不確かなことが伴っている。さまざまな遺跡と称するものが、しばしば本当の墓を曖昧にしまったし、記念碑が埋葬場所を紛らわしくさせてしまつてもいる。というのも、本物の墓の他に、何も納められていない記念の墓が数多く見つかるからである。数ある記念碑のお陰で、ホメーロスはさまざまな国の出であることになつてしまつた。エウリピデスの墓はアッティカにあつたが、埋葬地はマケドニアにあつた。またセウエルス帝の本当の墓廟はローマにあつたが、主のいない墓がガリアにもあつた。

この地上で、人目を引き付けて止まない黄金の壺に納められた人物は、これらの遺骨の味わつたような静寂を見出せなかつた。そのような壺の多くが、宝物を狙う卑しい輩によって破壊されたからで

ハイドリオファイア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

ある。マルケルスの遺灰も同様の理由から散逸してしまった。<sup>50</sup> 儲け話がちらつくときには、どの時代も不逞の輩に事欠かないのである。自らの行為を弁護するために、最も野蛮な略奪者が最も気の利いた修辭を編み出して、こう述べている。「黄金が一旦地中から取り出されたのならば、それはもはや大地のものではない。理に反して大地に託されたものを取り戻すのは理にかなったこと。遺灰を飾るべきなのは墓廟や豪壮な建造物であり、金銀財宝であってはならない。生者の品を死者に譲渡してはならないのだ。失つても誰も不平を訴えはしないものを持ち去ることは、不正な行為ではあり得ない。また、誰も所有者でないならば、誰も不当な仕打ちを受けたことにはならないのだ」<sup>51</sup>。

この燃えがらや古びた灰に何らかの力が潜んでいるというのも、実際に試してみれば、つまらない魔術の言い分に過ぎないことが分かるであろう。これらのぼろぼろに崩れた遺物や長く焼かれた破片は余りにも古過ぎて、そのような期待を挫いてしまふはずである。死者の骨や髪、あるいは爪や歯などは、老いばれた魔術師の宝物なのだ。私たちは、徒にこの魔術というものを復活させている。今の世に広まっている迷信が、私たちの祖先の愚かしさを留めているのは一目瞭然であろう。ことに魔術に関し、古い評言に従えば、この島国はベルシャに教示出来るほど完璧なのである。<sup>52</sup>

プラトンにおけるあの世の語り部は、彼の魂が多くの死者を眺めている間、十二日も腐敗せずに横たわっていたという。内臓を摘出しないまま、油を塗ったり水で洗ったりするだけで亡骸を腐敗から七日間守るのは、いかに私たちの優れた技量があろうとも、困難な

七八  
作業となるであろう。古の人々が、どのように骨や灰を他の燃えやすい混ざり物から正しく区分けしたのかは、歴史的にも説明されてはいない。だが、実際に彼らは区分けしたものを集め、ピルスの罎<sup>53</sup>も見逃さなかった。彼らが陶製の品や蓋、あるいは瓦や平石を亡骸の上や周りに前もって配置していたことは(事実、これらの壺が見つかったのと同じ野原で、しかも大して離れていないところで、多くの石が出土しているが)、付着物を入念に払い落としながら、焼けた骨を熊手で掻き集めている様子と共に、ガルウアヌスの名高いランプから見取れるところである。ローマにあるエスクイリヌスの野でウァース・ウーストリヌム、即ち死者の亡骸を火葬するのに用いた器を目にしたマルリアヌス<sup>54</sup>ならば、より明快な答えを与えてくれたことであろう。だが、この方法にも不満な人々は、さる君主を薪で火葬した際に、驚くべき工夫を編み出した。石綿(別名をサラマンドラの毛皮という不燃性の繊維)で織られた敷布で亡骸を包んだのである。これにより、遺骨と遺灰には何も混じらなかつたという。

人間一人の大きさが、僅か二、三ポンドの骨と灰になつてしまふというのは、その組成を考慮しない者には不思議でならないであろう。また、激しく燃え盛る炎に遭うと、なぜ肉体という組織からはごく僅かな塊しか残らないのかということも疑問な点であるかもしれない。骨自体ですら、灰になればその分量を著しく減らすことになる。しかも、その大半が揮発性塩から成っているので、焼き上げられた時にはごく軽い燃えがらに変つてしまい、嵩と重さが釣り合わないように見える。骨の成分のうち、塩という重いものが焼か

れて消滅すると、残るのは殆ど土だけになってしまふからである。このことは、柳のほうがオークよりも多量の灰を出す事実からも理解されるであろう。また、灰を目方でなく升で売るといふ、日常に行なわれる詐欺の手法もこれに由来している。

火葬された後で、みごとな骨格が現われる場合もあれば、<sup>(57)</sup> 肉体が素早く燃えてたちまち灰になる場合もある。水で膨れたヘラクレイトス<sup>(58)</sup>から炎が素早く燃え上がることなど、一体誰が期待出来ようか。毒殺された兵士の腹が破れて、二つの山と積まれた薪の火を消してしまったこともあるらしい(アルタルコスによる)<sup>(59)</sup>。だが、疫病の折<sup>(60)</sup>アテナイでは一人用の薪が、運び込まれた二人ないし三人の亡骸の役に立ったというし、カステイリヤの王により、<sup>(61)</sup>山積みになされた焼かれたサラセン人たちは、燃料がいかに少なくて済むかを身をもって示したという。パトロクロス<sup>(62)</sup>を火葬する薪が百フィートの高さに積み上げられたのに対し、古い船の破片がボンペイウス<sup>(63)</sup>を焼くのに十分であったともいふ。もしイサクの背負った薪が燔祭の供え物を焼くのに十分であるとしたら、人間は皆、我が身を焼く薪を持ち歩いていくことになるのかもしれない。

動物からは、よく燃える明かりや良い火傷薬<sup>(65)</sup>が得られている。精液は火と反対の性質を帯びていると思われるが、それで造られた肉体は燃えやすい塊となり、骨からでさえ炎を発するし、ほぼ全身からもある程度の燃料が得られるのである(ところが、湿り気の都である脳は、<sup>(66)</sup>燃えるという性質を殆ど持たないらしい。これらの壺の頭蓋骨が、他の骨ほどには焼け焦げていなかったのもそのためであろう)。だが、肉体はどの部分であっても、火を前にすると、あるい

は飛び去りあるいは沈んでいく。即ち、部分同士を繋ぐ靱帯が溶解すると、稀薄化され得るものは高く昇るが、それ以外は炭や生石灰、また灰となって下に溜まるのである。

石灰を得るために、エドムの王の遺骨を燃やしたのは理性を逸した野蛮な行為<sup>(68)</sup>とは思われない。だが、亡くなった縁者の遺灰を飲んだりするのは、悲しみを殊更に見せつけることであろう。友人の遺灰を持つ者は永遠の宝を得たことになる。火が消え去ると、腐敗が徐々に忍び込んでくるものである。十分に焼き上げられた骨の場合、火がそれ自身に対する壁を形成するが、これは、骨灰を成分として作られた試金用灰皿の類によって実証されている。太陽が合成したものを、火は分解はしても、その性質を変化させたりはしない。貪り食らう火の力は、必ずと言っていいほど、僅かばかりのかけらを大地に残すであろう。万物は大地の一部に過ぎないのである。そして、もし時が許すならば、母なる元素がそうした燃えがらを取り込み、再び太古の土くれに戻すであろう。

骨壺や古の墓の遺物を探す者は、寺院の廃墟にそれらを求めるべきではない。古には、どの宗教もこのような場所に亡骸を葬ったりはしなかったのである。それらが野原で見つかっているのは、貴人や個人を埋葬する際の古の慣習に倣っているからであろう。この慣習は、既にカーン人<sup>(69)</sup>やアラハム<sup>(70)</sup>の一族によって守られていたし、自分の土地の境界にあったというヨシユアの埋葬地<sup>(71)</sup>からも窺えるはずである。街道沿いに埋葬するのは、ローマの慣習にもかかっていない。死者の墓が人目に触れることになったし、通行人にとつては、死者を思い出し、死の警告を受け止めるよすがにもなったのであ

た。偉人の墓碑銘は通行人に對して、立ち止まって目を向けるよう望んでいた。但し、墓碑銘に用いられたことばは、時として教会の碑文<sup>72</sup>としては余りふさわしくない場合もあった。死者について語る、分別ある碑文が正しい生き方の範とされたほどであったために、敬虔な人物や殉教者の遺骨が、まず教会の扉の内側に入ることを許された。時代を経るにつれて、これが一般的な慣習に変わっていったのである。コンスタンティヌス帝は、特に許されて教会の回廊に埋葬されたのだが、イングランドで初めてこれが行なわれたのはカスレド王の時代においてであった<sup>73</sup>。

キリスト教徒は、墓の中で亡骸がどのように安置されるべきかを論じているが、壺に納めて葬る場合は、この議論を完全に避けることが出来た。宗教的な考察は差し控えるが、共同墓地や狭い埋葬場所では亡骸同士の間を交錯とを避けるために、ある特定の姿勢を取るものが認められてきた。これは、異教徒の文明にさえ見受けられるものであった<sup>74</sup>。ペルシャ人は南北の方向に横たえられたし、メガラ人やフェニキア人は頭を東に向けられたのである。アテナイ人は西に向けられたと考える人もいるが、このやり方をキリスト教徒は今でも踏襲している。ペーダ<sup>75</sup>なら、救世主の姿勢がこれであったと言うに違いない(イエスが顔を西に向けて十字架に昇ったことに關しては、私たちは、伝承や信頼に値する言説と争うつもりはない。ただ、イエスの十字架を両側のものより一際高く掲げた画家の筆は賞賛出来ない。というのも、これについては、確固たる説明が歴史上見られないし、ヘレナ<sup>76</sup>によって発見された十字架も、長さや大きさの点でそのような特徴を示していないからである)。

遺骸が墓から引きずり出されたり、頭蓋骨が酒杯にされたり、また骨が敵を楽しませ慰める笛に変えられたりするのは、火葬されていけば免れたはずの思まわしい悲劇である。

壺に入れて埋葬された遺骨や火葬された遺骸は地虫を恐れずに済むし、蛇にあてがわれることもない。亡骸をそのまま埋葬したときには、各部分に必ず腐敗が生じるらしく、背骨の髄から蛇が出て来たと言う者もある。私たちは、地虫が墓には付き物だと思ひ込んでいるが、実際に見つけるのは容易なことではない。教会墓地では、たゞ深さ一フット以内のところには殆ど見られない。教会内では、たとえ腐敗が始まって間もない遺骸の場合でも、地虫はさらに数が少ないか、あるいは全く見られないかなのである。歯や骨、髪などは、腐敗に對して最も長く抵抗をする。十年前に教会墓地で埋葬された水腫病患者の遺骸から、私たちは脂肪の塊を見出した。それは、地中の硝石と体内の塩とアルカリ性の水分とが大きな脂肪の塊を凝固させ、極めて固いカステール石鱗状に変質させたものであった。その一部は私たちの手許に残っている。ペルシャ人との戦闘の後、ローマ兵の亡骸が僅か数日で腐敗したのに対し、ペルシャ兵のものは乾燥し、腐敗することはなかった<sup>77</sup>。同じ場所に埋葬された亡骸であっても一律に分解するとは限らないし、骨もまた同じように朽ち果てるわけではない。もっとも、あの恥ずべき病の場合には、亡骸が長く残ることなど期待出来ないであろう。ドーセット侯爵の亡骸は臘布でしっかりと包まれていたらしく、七十八年後に発見された時も腐敗していなかった<sup>78</sup>。普通の墓に納められた亡骸は、やがて粉々になってしまう。遺骸の各部分が、固くしっかりと繋がって原形

を留めているような状態をもたらす原因としては、乾燥、埋葬場所が深かったこと、あるいは炭の作用などが考えられる。人の肉体で最古のものは、化石化した骨となつて残つておられると思われ、例えば（塩の柱となつたロトの妻の話やオルテリウスの変身譚を受け入れるわけではないが）、大洪水のときの亡骸で化石となつたものは、ヒラミッドよりも古いはずである。アレクサンドロス大王がキュロス王の墓を暴いたとき、残つていた骨は彼の体つきを明らかにしたという。だが、壺に納められた骨片からだと、この点については曖昧な推測をするしかない。墓に埋葬するのと較べて、故人の体格にまつわる詳細が全く分からずじまいに終わるといふ不都合があるのだ。埋葬された場合の遺骨は、身の丈を安定した状態で示すだけでなく、体つきまで教えてくれるので、肉を付けたときの姿を骨相学で推測することも不可能ではない。また、生前の完全な姿をしていたときには、筋肉や肉がどのような形で骨に付いていたのかをも推測出来るのである。カリオラ<sup>(83)</sup>を十分に広げれば、みごとな形をした馬の臀部が分かるのだが、しっかりと形を留めた頭蓋骨も、肉付けされたときの外観とある程度類似していると考えられる。骨を仔細に見れば、性別を十分に判定出来るものである。肌の色でさえ推測出来ないことはない。というのも、黒人の頭蓋骨を識別する際は、誤解することが困難なほどだからである。グンテの描く人物は、顔だけでなく頭蓋骨でも登場している。足以外の部分で、体つきを明らかにしたり、全身や各部分についての推測を可能にする以上、ヘラクレスも、その足によってのみ身元が明らかにされたわけではない<sup>(86)</sup>。また、頭の大きさから全身の大きさが計測され、その姿かた

（ハイドリオタファイア（その一）（生田省悟・宮本正秀）

ちから主だった機能が推測される以上、骨相学は私たちの死んだ後でも有効なものであり、私たちが墓に入ったからといって決して終わるものではない。

厳密な思弁家は、これらの長いこと残つた遺物を観察して、古の人々を偲ばせる優れた記念物ではあるが、後の時代にとつては殆ど役に立たないものだと思うかもしれない。また、全ての被造物を自らの下に服従させる力を持つたお方が散逸した原子を元に戻し、あらゆる物から一個の人間をお造りになるのなら、敢えて遺骸から復活を期待するなど無用のことだと考えるかもしれない。だが、遺骸とは異なるもの、即ち永遠の存在である魂は、しかるべき偶然によって肉体という衣を纏うことで、その独自性を保っているのではない。とはいへ、周知のように、聖者たちは聖都の付近にある墓や墓廟から復活したのであつた<sup>(87)</sup>。その復活に与かることを願つた古の父祖たちが、己の骨をカナーンの地に横たえてほしいと強く望んだのだと考える者もいる。あるいは、たとえカルヴァリの丘から三マイル離れていても、せめて、死者の初穂を生み出す彼の地に埋葬してほしいと望んだというのである。また、学識のある人々の推測する通り、肉体がその最も大きな遺物のあるところで復活するのなら、遺骨や遺骸が、エゼキルが幻を見た野原に天使によって移されたり、あるいは誰かの命令に従つて、裁きの谷とされるヨシヤファトへ運ばれたとしても、復活の地を特定し損なう者は殆どいないはずだと思われる。

## 註

一読して明らかかなように、本書では古今の著作が頻繁に引き合いに出されている。こうした箇所を紹介するに当たっては、いささかのためらいを覚えながらも、各種の注釈等に従うしかなかった。ブラウンの博引傍証ぶりを確認しておくためには、止むを得ないと思われたからである。また、当該の出典を逐一参照する作業も、訳者の能力及ぶところではなかったことを断わっておかなければならない。なお、原著にはギリシヤ語やラテン語を交えた欄外註が付されているが、これも可能な限り、出典の具体的な箇所を補足した上で紹介することにした。以下の註のうち、「」で括られ、末尾に(B)とあるものは、この欄外註に概ね従っていることを示すものである。

\* 本書は、一六五八年に『キュロスの庭園』(The Garden of Cyrus)と合本の形で刊行された。訳出に当たっては、数種の版を参照したが、直接にはS. Thomas Browne: *Religio Medici, Hydrophtia, and The Garden of Cyrus*, ed. Robin Robbins (Oxford: Clarendon Press, 1972; rpt. 1982) をテキストとした。

## 献辞

- (1) ノリッジの北にあるクrostウィック・ホール在住の人物で、ブラウンの親しい友人。父親のサー・チャールズはブラウンの患者であった。
- (2) 「ボンベイウスの息子たちはアジアとヨーロッパの地に埋葬されたが、ボンベイウス自身にはリビアの土が被せられた」(B)。出典はマルティアーリス『エピグラム集』五・七一・二。
- (3) 「あなたのお屋敷とグリーンランドとの間にある海を除けば、それほど直線的というわけでもありませんが」(B)。
- (4) 「キモンによって持ち帰られた(アルタルコス『キモン』による)」(B)。

該当箇所は六・二・六。

- (5) 「ローマの楕円形競技場に据えられた巨大な壺。見世物が催された際に、観客の声を反響させるために考え出された」(B)。
- (6) 「私の尊敬する友人にして誠実な紳士、サー・ホレイショ・タウンシエンド殿が所有しておられる」(B)。イニゴ・ジョーンズによって一六三〇年に建造されたノーフォークのレイナム・ホールを指す。
- (7) ローマの貨幣やメダルに刻まれた肖像のこと。
- (8) ベトロニウス『サテュリコン』四二・五。欄外註には、当該のラテン語が示されている。
- (9) 「その計算によれば、この世界は非常に年老いた老人となる」(B)。ブラウンは、地球が二万年から十万年前に誕生したとするエジプトの算定法に言及している。
- (10) 「この点、ダグデイル氏は立派に研鑽を積まれており、知性ある高貴な方々の支持を受けるに値する」(B)。ブラウンは、サー・ウィリアム・ダグデイルの『英国修道院史』(一六五五年)や『ウォリクシャ故事』(一六五六年)がキヤムデンの『ブリタニア』(一五八八年)に匹敵すると考えている。
- (11) このような記述から、清教徒が席卷していた当時の社会・政治状況に対するブラウンの心情が窺えるかもしれない。ちなみに、かつてブラウンは「一般に嫌悪される対象のうちで、とりわけ私が嫌悪し嘲笑するものがあるとすれば、それは理性と美德と宗教の大敵、即ち民衆である」(『医師の信仰』二・二)と書いたことがある。また、『キュロスの庭園』の献辞においても、「無分別なこの時代」ということが見受けられる。
- (12) ゼウクシスがヘレナ像を描く際に、クロトンの選り抜きの美女が五人、モデルとして集められたという(キケロ『創意について』二・一)。
- (13) 「ヘンリー二世の時代に(キヤムデンによる)」(B)。該当箇所は『ブリタニア』『サマセット』。
- (14) 壺に納められた遺骨が、かつて英国を占領していたローマ人のものだ

アラウンは考えて、その論議を進めていくことになる。但し、第二章の終わり近くでは、ローマの慣習に従ったフリトン人のものかもかもしれないという見解も提示されている。

- (15) ホラティウス『詩論』四七二。  
 (16) 「極上のダイヤモンドは太古の岩より採れる」(B)。

## 第一章

- (1) 「ペルーの豊かな山」(B)。この山は銀鉱のあることで知られていたといふ。  
 (2) 伝統的に、アグムは地表から四クオーターの深さの土によって造られたと言われていた。  
 (3) 各地に見られる古墳が、民衆の間では巨人の墓と考えられていた。  
 (4) 『創世記』七・一七―二三。  
 (5) 同書二五・九。  
 (6) 『申命記』三四・六、及び『ユダの書』九。  
 (7) ヘーラクレスは、戦士アルゲウスを火葬したと言われている。  
 (8) 『イーリアス』二三・六一―二五七、『オデュッセイア』二四・六五―八四。  
 (9) スターティウス『テーバイ遠征物語』一一・六〇―一〇四、六・五四―二四八。  
 (10) 『士師記』一〇・三一五。  
 (11) 『イーリアス』二四・七八―二八〇四。  
 (12) 「カラブリアのクイーントウスによる」(B)。該当箇所は『ホメーロス後日譚』一・七八九―八〇三。  
 (13) ペルシャ近隣の国キオニアの王グルンバーテス(マミアヌス・マルケリヌスによる)。(B)。

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

- (14) 「アルノドウス・モンターヌス、ジラルディ、キルクマンによる」(B)。なお、R. Robbins (194)によれば、アラウンはこれ以降の記述において、J. キルクマン『ローマの葬送について』(一六二五年)、L. G. ジラルディ『墓碑論』(一五三九年)、F. ペルツ『諸国の葬儀』(一六三九年)などに依拠しているらしい。  
 (15) 東ヨーロッパに居住していた諸民族。  
 (16) 『博物誌』七・五四。  
 (17) 紀元前五世紀に定められた法律。欄外註には、当該の条項がラテン語で紹介されている。  
 (18) リウィウス『ローマ史』八・七。  
 (19) アルタルコス『ヌマ』二二・二。  
 (20) 「ついに薪に火がつけられた(オウィディウス『暦』四)」(B)。  
 (21) プリニウス『博物誌』七・五四、及びキケロ『法律論』二・二二。  
 (22) プリニウス『博物誌』一〇・六。  
 (23) タキトウス『年代記』一六・六。  
 (24) (21)と同一箇所。  
 (25) 「彼の墓には、それに応じた碑文が刻まれた(ダマスカスのニコラスによる)」(B)。  
 (26) 『オデュッセイア』四・四九九―五一一。  
 (27) 『ディオドロスによる』(B)。  
 (28) 「ラムシウスによる」(B)。  
 (29) 「司教マルティアーリス・キュアリアヌスによる」(B)。これは二世紀頃、スペインであった話らしい。  
 (30) 「サムエル前書」三一・一二。  
 (31) 『アモス書』六・一〇。  
 (32) これら三名については、それぞれ『歴代志略下』二二・一九、『エレミヤ記』三四・五、『歴代志略下』一六・一四に記述がある。

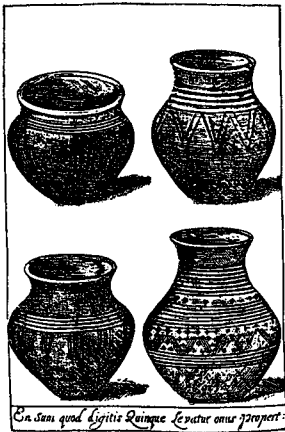
ハイドリオタファイア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

八四

- (33) 「スエトニウス『ユリウス伝』による(B)。該当箇所は八四・五。  
 (34) 「シモンによって建立された、あの壮大な墓廟のような(『マカベア前書』一・一二三)」(B)。  
 (35) 「立派な建物であった。ユダヤ教の僧侶が、ヨセフスの時代までそれを管理していた(ヨセフス『ユダヤ故事』一〇)」(B)。  
 (36) 『詩篇』一六・一〇、『使徒行伝』二二・二二、及び『ヨハネ福音書』一九・三六。  
 (37) 『ルカ福音書』二二・一八には、弟子たちの髪に関するキリスト自身の予言が記されている。  
 (38) 周知の通り、これらの旧約の人物は、キリストの復活の予表と考えられていた。  
 (39) 「おおアサロム、アサロム、アサロムよ(『サムエル後書』一八・三三)」(B)。

## 第二章

(1) 初版では、左に掲げた図版が、ル・グロスに宛てた書簡の直後に載せられていたという。下に添えられた「我は、五本の指で持ち上げられる重さなり」というラテン語は、プロペルティウス『エレゲイア』四・一一・一四の詩句である。



- (2) 「敬服すべき友人ウォルシングムのトマス・ウィザリー博士から送られた壺の中に」(B)。  
 (3) タキトウス『年代記』一二・三二。  
 (4) 同書一四・三一―八。  
 (5) 『エゼキル書』二七・一一のガマデ人は、(肘を意味するギリシャ語を語源とする)アンコニアの住民だと考えられていた。従って、ノーフォークの「より明確な呼称」とアラウンは言うのである。  
 (6) 「住民の数は夥しく、数多い家はガリア人のそれによく似ていた(『ガリア戦記』五・二二)」(B)。  
 (7) タキトウス『年代記』一四・三三。  
 (8) 「敬愛する友人ロブ・ジェイゴン殿の地所で発見された。壺に納められていた品々の若干を、大いに尊敬すべき友人である準男爵サー・ウィリアム・バストン殿が保管しておられる」(B)。  
 (9) 『アントニヌス帝行幸記』に出てくるシトマグスは、イスプウィチの北東にあるストウマーケットのことで、テトフォードではなかったらしい。  
 (10) 「ヤーマス近郊のカスターでは、殆どがイースト・ブラディ・バラから見つかっている。その地主のトマス・ウッド氏は礼儀正しく勤勉で、この方面にも造詣が深い。私たちも、氏からさまざまな銀貨や銅貨を頂戴している」(B)。  
 (11) 立派な紳士にして真の徳の手本でおられる、我が友人の準男爵サー・ラルフ・ヘア殿の領地」(B)。  
 (12) 「エレ・ナ・エレと刻印された女帝モード(マティルダ)のものが、バカナム城で発見されたと言われている」(B)。なお、「エレ・ナ・エレ」の意味は明らかにされていない。  
 (13) 「ソープで」(B)。  
 (14) 小額の貨幣。  
 (15) かつてブリテン島東部に居住していた人々。



- (16) ノリッジがウェンタに取って替わったのは事実だが、その廃墟から勃興したのではなかった。
- (17) 『プロンプトン年代記』による(B)。ノルウェー王スウェイン・フォークビアドとウルフェル・スニリングとの戦いは一〇〇三年のことであった。
- (18) 『アルタルコス』『リュクルグス』九による(B)。但し、銅ではなく鉄の貨幣であった。
- (19) カエサル『ガリア戦記』五・一一。
- (20) 『ストウ』『ロンドン要覧』(一六〇三年)による(B)。
- (21) 『サトルナリア』七・七・五。
- (22) セプティムス・セウエルス帝は二二一年に亡くなった。ブラウンは、二二三年に亡くなったセプティムス・アレクサンドロス帝と混同している。
- (23) 「キリスト教徒は弔いの薪を非難し、火葬を忌避した(ミニキウス)オクタウィウス』による(B)。該当箇所は一一・四。
- (24) 「シドニウス・アポリナリスによる(B)。該当箇所は『書簡』三・三三。
- (25) 「彼は私に二つの埋葬場所を与えて下さるであらう(『創世記』二二・九)」(B)。ブラウンはウルガタ聖書からの引用をしている。
- (26) プロペルティウス『エレゲイア』四・七・九。
- (27) 『ヴェジエネレ版』『リウィウス』四による(B)。
- (28) 「シフレによる(B)。ファラモンは、メロヴィング王朝を興した人物である。
- (29) ヨセフス『ユダヤ故事』七・一五・三。
- (30) ブラウンは、七十人訳聖書『ヨシヤ記』二四・三〇を典拠としている。
- (31) キケロ『クイントゥス書簡』二・一五(二六)・四とされるもの。
- (32) 『ディオーン・カシウスによる(B)』。
- (33) 『世界要覧』三・二。
- (34) 『アマンドゥス・ツイレケンシスの『歴史』、また、スペイン人ヒネーダの『世界史』においても述べられている(B)。なお、ここで言及されている

ハイドリオタフィア(その一)(生田省悟・宮本正秀)

- るポリュドロスの著作は『英国史』である。
- (35) 『ガリア戦記』六・一六。
- (36) 『アグリコラ』二一。
- (37) ブラウンは、ヴォルミウス(後出)に引用されたガイヌスの著作(二五七八年)に基いているらしい。
- (38) サクソ『デンマーク史』五、オラウス『ゴート史』一六・三七。
- (39) 『ゲルマニア』二七。
- (40) 「ロイゾルド、アレンデイティデ、イルドティデ(B)。このように、火葬された王の名が、それぞれの時代区分の根拠となっていた。
- (41) フロト大帝の八代後の王。
- (42) キリスト生誕の頃に、デーン人を治めていたという伝説的な王。
- (43) リングはフロトから十五代後の王。ハラルドは十四代後の王。
- (44) *Sir Thomas Browne: The Major Works*, ed. C. A. Partridge (Hammondsworth: Penguin Bks, 1977), p. 276, n.によれば、ブラウンが考察している骨壺はローマ人のもではなく、既に本章でも言及されていたサクソン人のものであったらしい。
- (45) 「オラウス・ヴォルミウス『デンマークの遺跡』(二六四三年)による(B)。
- (46) 「アドルフス・キブラエウス『シュレスヴィヒ年代記』による(B)。
- (47) 「オクスフォードシャにおいて(キヤムデン『ブリタニア』による(B)。
- (48) 「チェシヤにおいて(T・トワイン『英国諸事』による(B)。この著作は一五九〇年に刊行された。
- (49) 「ノーフォークにおいて(ホリンシェド『アングロサクソン年代記』による(B)。

## 第三章

- (1) 『マタイ福音書』一三・二九(B)。  
 (2) 「エウリピデスの」(B)。該当箇所は三一七―二〇。  
 (3) J・B・カサリウス『ローマについて』(一六五〇年)、及びA・ボシオ『ローマの地下墓地』(一六三二年)。  
 (4) 『詩篇』六三・九(B)。  
 (5) プリニウス『博物誌』三五・四九。  
 (6) 同書二六・六。  
 (7) 同書三五・四五。  
 (8) 同書三五・四六。  
 (9) 「この世界が収め得ぬ者を、汝収むべし」(ディオオン・カシウス七七・一五―一四)(B)。  
 (10) 『イリアス』二三・二五四。また二四・七九六には、ヘクトールの遺骨を取めた壺が「手触りのいい紫の衣」で覆われたとある。  
 (11) 「涙ながらに埋葬せり」(B)。  
 (12) 「ラツイウス」による(B)。  
 (13) 「約五百年(プラトンによる)」(B)。該当箇所は『国家』八・五四六。  
 (14) 古代ローマでは葡萄酒の醸造年代が、その時期に在職していた執政官の名前によって示されていた。  
 (15) 「百年間、瓶に詰められていたオピミウスの年の葡萄酒」(B)。オピミウスが執政官を勤めていた紀元前一二一年に醸造された葡萄酒は、高い評価を受けていた。引用の当該箇所はペトロニウス『サテュリコン』三四・六であるが、原典では「ファレルヌス酒」となっている。  
 (16) 「十二表一」による(B)。欄外註には、該当する条文がラテン語で紹介されている。

- (17) 「プリニウス『博物誌』一六・七八による」(B)。  
 (18) 「スリウス」による(B)。  
 (19) プリニウス『博物誌』一六・七九。  
 (20) 『ヘブル書』九・四。  
 (21) 『ユダヤ故事』一・三・五、二〇・二・二。  
 (22) 「ゴロピウス・カサリウスによる」(B)。  
 (23) プリニウス『博物誌』三六・二一。  
 (24) 「ピリンググッチオによる」(B)。  
 (25) 「エルムムで」(B)。  
 (26) 「プルタルコスによる」(B)。該当箇所は『フィロポイメン』二一・三。スパルタの伝説的な立法者。  
 (27) ウアロ『メニッポス風諷刺』八一。  
 (28) プラトン『法律』九五八d―e。  
 (29) 『マタイ福音書』二七・五一―八。  
 (30) 貧民や罪人などの死体がここで焼かれたり、犬に投げ与えられたりしたという。  
 (31) 「スエトニウス『デイベリウス伝』による」(B)。該当箇所は七五・三。スエトニウス『ネロ伝』四九・四。  
 (32) 「スエトニウス『ドミティアヌス伝』による」(B)。該当箇所は一七・三。  
 (33) ホメーロス『オデュッセイア』二四・七六―七。  
 (34) 「アントニヌス帝行幸記」に関する、博識にして敬愛すべきカソーボン氏の記述を参照(B)。  
 (35) ペトロニウス『サテュリコン』三四。欄外註には当該のラテン語が引かれている。  
 (36) 「宴会の際の野蛮な慰み。梁から吊された縄で首を縛られた男が、丸い石の上に立たされる。但し、手には短刀を持っていて、石が転がされた瞬間に縄を切れるようになっていた。もしも不首尾に終わつたならば、命を落と

- し、見物人の笑い者となるのである(アテナエウスによる)(B)。
- (39) 『*Dis Manibus* (地下の神々に捧ぐ)』(B)。
- (40) 「ボシオによる」(B)。
- (41) 『出エジプト記』二五・三一―四〇。
- (42) 聖アントニウスと聖ヒエロニムスのこと。前者は隠者として墓に住み、後者は若い頃、日曜ごとにローマの地下墓地を訪れたという。
- (43) 『ヨハネ福音書』一一・四三―四四。
- (44) 『エゼキル書』三七・一一―一四。
- (45) 『哲学者伝』において。
- (46) パウサーニアース『ギリシャ案内記』一〇・二四・三。
- (47) 「パウサーニアースによる」(B)。該当箇所は『ギリシャ案内記』一・二二。
- (48) 「ランピリデイウス『セウエルス・アレクサンドロス伝』による」(B)。これはアウグストゥス時代の史書で、該当箇所は六三・三。
- (49) 「トラヤヌス帝のこと」(B)。ランピリデイウス『セプティミウス・セウエルス伝』二四・二。
- (50) 「プルトルコス『マルケルス』による」(B)。該当箇所は三〇・二・三。
- (51) 「墓に埋もれた財宝を発掘するように命じた、ゴート人の王テオドリクのこと(カッシオドルス『ウァリアエ』四・三四による)」(B)。
- (52) 原文の「テラ・ダムナータ」は、焼成後の残渣を表わす錬金術の用語。
- (53) プリニウス『博物誌』三〇・四。欄外註には当該のラテン語が引かれている。
- (54) 『国家』一〇・六一―四bにおけるエルのこと。
- (55) 「これは燃えなかった」(B)。出典はプリニウス『博物誌』七・二。
- (56) 「ローマ地誌』による」(B)。これはマルリアヌスの著作で、一五四四年刊。
- (57) 「リセルスによれば、老人の骨。コロンブスによれば、長身でも肥満でも

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

- ない若者の骨」(B)。
- (58) ラエルティウス九・三によれば、ヘラクレイトスは水腫病で亡くなったとされる。
- (59) 該当箇所は『テイベリウス・グラックス』二二・四―五。
- (60) 「トウキユデイデースによる」(B)。該当箇所は『歴史』二二五―二四。
- (61) 「ウアラによる」(B)。
- (62) ホメーロス『イーリアス』二二・二六四。欄外註には当該のギリシャ語が引かれている。
- (63) プルトルコス『ポンペイウス』八〇・二。
- (64) 『創世記』二二・六。
- (65) 「蛙のはらごと卵の白身」(B)。
- (66) 「ヒボクラテスによる」(B)。
- (67) 「アモス書」一一・一」(B)。
- (68) 「アルテミシアが、夫マウソルスの遺灰を飲んだように」(B)。出典はウアレリウス・マクシムス四・六・続編一。
- (69) 『創世記』二三・五―二〇。
- (70) 同書四九・二九―三二。
- (71) 『ヨシユア記』二四・三〇。
- (72) 「旅人よ、生まれ」(B)。
- (73) 七五八年にカンタベリ大司教カスパートが、大聖堂に埋葬されている。
- (74) 「キルクマンによる」(B)。
- (75) 一般に「ヴェネラブル・ビード」として知られる英国の聖職者(六七三―七三五年)。
- (76) コンスタンティヌス帝の母親で、晩年に聖地巡礼をして聖十字架を発見したと伝えられる。
- (77) アミアヌス・マルケリヌス一九・九・九。
- (78) 言うまでもなく、梅毒のこと。

ハイドリオタフィア(その二)(生田省悟・宮本正秀)

- (79) 「ドーセット侯トマス<sup>1</sup>の遺骸。一五三〇年に埋葬された後、一六〇八年に臘布が切り開かれたところ、遺骸の保存状態は完璧で全く腐敗していなかったし、肉も硬化していなかった。ただ、色と大きさと柔らかさは、埋葬されて間もない亡骸とよく似ていた(レスター<sup>2</sup>シャ<sup>3</sup>に関するバートンの記述による)。(B)。
- (80) 『創世記』一九・二六。
- (81) 「彼の描いたロシアの地図において」(B)。オルテリウス『世界図形劇場』(一五七四年)には、石と化した東方の民族が示されているという。
- (82) アリアノス『アレクサンドロス出征記』六・二九。
- (83) 「寛骨で形作られている、馬の骨格部分」(B)。
- (84) 「その並外れた厚さによって」(B)。
- (85) 『煉獄篇』一三・三一一―三において、詩人ダンテは、生前貪欲であった者たちがやせ衰えているのを見て、彼らがエルサレムの包囲に遭ったかと思ったほどであった。だが、彼らの顔に人間(HomoないしOno)の徴を読み取るのはたやすかった。両頬から走る線が、眉の上で弧を描いてから鼻に届き、Mの字を作っていたし、窪んだ目は〇となっていた。これでOnoを表わしていたのである」(B)。なお、欄外註には、当該箇所がイタリア語で引かれている。
- (86) アウルス・ゲリウス『アッティカの夜』一・二。
- (87) 『マタイ福音書』二七・五二―三。
- (88) 『創世記』四九・二九。
- (89) 「『エゼキル書』に関するティリヌスの記述による」(B)。聖書の該当箇所は『エゼキル書』三七・一一―一四、『ヨエル書』三・二及び一一。